

主のご復活、おめでとうございます！

復活したイエスと出会って弟子たちは「使徒」になった

「宗教」の授業で「弟子たちの前に復活された」場面をいくつか読むと、生徒たちは「なんだかイエスは幽霊みたい。いきなりあらわれてすぐに消えてしまう」「それがイエスとわからなかったのはヘンだよ」っていいいます。私は「確かにヘンな話だよ。イエスが復活されたということを経史的な事実として示すものは何もない。けれどこれだけは確かな歴史的な事実なんだ。弟子たちはそれまで失望して国に帰ろうとしていたり、どこかに隠れていたりしたんだけど『何か』があって再び結集して教会をつくり宣教にのりだしていく。その『何か』が復活したイエスとの出会いだった。」復活したイエスと出会って、弟子たちも復活して「使徒」になったのですね。（土屋 至）



第45回日本カトリック映画賞決定！

『コンプリシティ／優しい共犯』近浦 啓 監督 / 2020年作品

第45回日本カトリック映画賞に劇映画『コンプリシティ／優しい共犯』（近浦 啓 監督 / 116分 / 配給：クロックワークス）が選ばれました。技能実習生として中国から日本にやってきた青年チェン（ルー・ユーライ）と、彼が働く蕎麦屋の主人・井上（藤竜也）との心のつながりを描く感動作です。チェンは病気の母と年老いた祖母を故国に残し、借金を背負ってやってきましたが、理不尽な労働環境に耐えきれず失踪し不法滞在者となってしまう、リュウという別名で他人になりすまし生きることを強いられます。不法滞在者としての不安に加え言葉の壁を抱えるチェン。息子と折り合いが悪い蕎麦屋の主人・井上。やがてふたりの間に国籍や言葉の壁を超えた、人としての「優しさ」が芽生えます。「外国人技能実習生」に対する日本の社会の差別や無理解の実態が画面から迫ってきます。この作品の素晴らしさについては晴佐久神父の〈授賞にあたって〉をお読みください。



従来は、映画館や試写室で多くの作品を鑑賞し、その中から候補作2本を選び、全員参加での選考上映会を行い映画賞を決定していましたが、今回はそれが出来ず、オンラインでの試写やDVD回覧により事前に候補作品を鑑賞し、リモートで感想を述べ合う選考上映会を行いました。「コロナ禍で生活もままならず苦しむ人たちが多く、映画を選び上映することが本当に大切なことなのか。」という胸に届く問いもありました。「いい映画とは？」「映画の力とは？」



そんな問いをメンバーたちは改めて意識しました。映画を観終わって「ああ、よかったね」で終わらせるのではなく、世の中の差別や分断に対する理解が深まり、それらにチャレンジする勇気を与えてくれる、そんな力がある映画を選びたい。授賞作『コンプリシティ／優しい共犯』はこのような過程を経て選ばれた、私たちの思いのこもった作品です。選考に悩んだことで、コロナ禍の時代だからこそ多くの方々に観ていただきたい映画にたどり着くことができました。

授賞式および上映会、そして近浦啓監督と晴佐久昌英神父とのトークショーについては、コロナ禍の状況にもよりますが、可能であれば10月頃を予定しております。決まり次第シグニスのWEBサイト、Facebookなどでお知らせいたします。皆様とこの映画のすばらしさを分かち合う機会が実現しますよう、願っております。

（映画チーム 鈴木浩）

★映画公式サイト：<https://complicity.movie/>

<授賞にあたって> シグニスジャパン顧問司祭 晴佐久 昌英

ベトナム人の技能実習生たちを教会に招いて、毎月食事会をしている。彼らは私のことを親しみを込めて「チャー」と呼ぶ。「お父さん」という意味だ。生涯独身を誓ったカトリック司祭としては照れ臭くもあるが、こちらもいつしか「わが息子よ」とベトナム語で呼びかけるようになり、そのうちの一人が実習先の工事現場で指を落としかけたときなど、緊急入院した病院に飛んで行ったものだ。異国で心細かったのだろう、彼は私の顔を見ると「チャー！」と言って、泣いた。

『コンプリシティ／優しい共犯』は、現代の孤独な日本を救う力を秘めた映画だ。人と人を隔てる壁を超えて他者と家族になっていく物語であり、そのためには時に掟をも超えた優しさが必要だというリアルが描かれているからだ。イエスは、働くことを掟で禁じられている安息日に病人を癒したことを批判された時、こう言った。「あなたたちの中に、自分の息子が井戸に落ちたら、安息日だからといって引き上げてやらない者がいるだろうか」。映画の中で、主人公の技能実習生を雇ったそば屋の主人にとって、一人の「外国人労働者」が法律よりも大切な「自分の息子」になっていくという、その優しい共犯を映し出す画面の向こうに、日本の希望が透けて見える。

指を落としかけたわが息子の指がつながり、無事退院したお祝い会ですき焼きを振舞ったことを思い出す。さまざまな不安に耐え、経済的にも困窮している彼らに、日本のごちそうを思いっきり食べさせたかったのだ。そのせいだろう、そば屋の夫婦が主人公にすき焼きを食べさせる何気ないシーンで、突然涙があふれた。そうそう、そうなんだよ、すき焼きなんだよ、と。

現代社会に不足しているのは、労働力ではなく、想像力だ。目の前にいるこの若者がどんな痛みを抱えているのか。故国にはどのような家族がいて、これからどう成長していくのか。そこに思いを馳せることが出来て初めて、私たちは人間らしく助け合って生きていくことが出来るのではないか。乾き切ったこの世界を瑞々しい想像力で潤すことこそは、映画の使命であろう。人を遠ざけるコロナの時代に、人を結ぶ使命感を持った気高い映画に出会うと励まされるし、私たちもその映画を励ましたいと思う。授賞理由である。

東日本大震災：カトリック調布教会の10年 「夜は感謝で眠る」

大きな揺れが襲ったのは東京で映画を観ている最中だった。いわゆる帰宅難民になった。大震災後の混乱の中、シグニスの仲間ひとり、親戚が仙台にいる、どうしても行くと、被災地に向かった。彼に支援品を託した。

教会では被災地のための祈りと義援金集めが始まる。真生会館の若者グループ WAKAGE が被災地に行くとの情報に急遽の支援物資集めも始めた。2011年5月に東松島の瓦礫撤去に参加したメンバーを中心に「被災地とつながる会」を発足させ、仙台地区や南三陸町を支援。シグニスの別の仲間がシグニスとCLCの両方の支援を受けて、釜石ベースを起点にして被災地の姿をビデオに収めた（「あの日から」ほか3部作）。その女性に案内されて釜石・大槌・大船渡を初めて回ったのが、2012年1月。調布教会はサレジオ繋がりで、長崎教会管区担当のカリタス大槌(サレジオ会の古木真理一神父がベース長)を支援することになり、3月に教会委員会メンバー中心に6名で陸前高田(脊椎損傷者用風呂設置支援)、大船渡、釜石を経由して大槌入りした。ベース長の古木神父からお話を伺い、映像や城山公園からの被害状況遠望に改めて衝撃を受

け、夜の暗黒の闇の中の「希望の光」の大槌ベースの明かりと200m位先の自動販売機の明かりを見つめた。

初回の活動は支援品の整理、以降瓦礫の片付け、花壇づくり、漁業支援、農業支援、等々慣れない仕事だが、地元の人々の普段の作業の一端を体験できたのも新鮮だった。またイベントのお手伝いや、仮設を訪問してのお茶っこの会話、そしてクリスマス会では一緒に仮装を楽しんだ。個人的には友人のミュージシャンを同行しての仮設訪問やライブ、大船渡教会でのハルノコ神父やフィリピン人のお母さんたちの歌声のCD録音のお手伝いもした。

元校長先生の信徒が南相馬に住み込んで子どもたちの勉強をみたり、「されじ庵」が仙台やいわき市の仮設で蕎麦打ちをしたり、「つながる会」は、南三陸町のフィリピン婦人の家庭に毎月5kgのお米や、ミシン、布等を贈った。仮設で出会った当時小2だった少女とは、現在も繋がっている。

CTVCのボランティアに定期的に参加して仮設を訪問するシスターや信徒もいた。逆に福島から日曜日に野菜を売りに来る方もいた。古木神父や福島の鈴木キミ子さんの講演会のほか、毎年バザーでは支援活動の展示・上映・被災地産品の即売をした。

教会としてはバザー収益金やクリスマス献金の大きな部分を被災地に直接支援品・支援金として贈り、また被災地ボランティアの交通費に回していたが、活動の縮小に伴い支出も減っている。

被災1年後から毎月大槌に行ってマッサージとお茶っこをしている「調布ひょうたん島」はカリタス大槌が閉鎖された3年前からは隔月訪問になったが、心待ちにしてくれる地元の人々との交流が訪問継続の動機。特にマッサージ師免許を持つ片瓜さんは人気者だ。彼は地元の方々の体を熟知している。免許なしメンバーは“先生”の弟子になったり、大型バイブレーターを使って補助をする。

地元の人々に混じって大槌ロック・フェスティバル（この時は井上弘子さん主催のイスラエルとパレスチナと日本の若者の「平和の架け橋プロジェクト in 東北」に同行）や秋の大槌祭りを楽しんだり、大槌が心の故郷になった。現地の新鮮な海産物の夕食や他教会からのボランティアとの交流、やはり人と人との出会いに不思議を感じる。

とても悲しい男性が亡くなった。「鎮魂のいのり いまなお忘れず、残りし老いの力ためさん。」とお元気だったが、風邪をこじらせてしまった。皆が悲しみに暮れた。大槌ベースの女性スタッフが結婚して赤ちゃんが生まれた。皆で喜んだ。

土盛りされ造成されて復興住宅他が建っても、戻ってくる若者は少なく、復興した三陸鉄道の駅前でさえ商店・住宅はわずか。街全体としても半分以上が空き地なのが寂しい。いつ昔の賑わいを取り戻せるのだろうか。そして心の復興はいつになるのだろうか。



2012年7月大槌町の中心部

2020年3月からの新型コロナウイルス禍で以降は訪問できず、片瓜さんが時々電話・メールで連絡を取り合っている。

話は変わるが、最初は宗教色を出さない様に注意したが、5-6年目から長崎のシスターたちも修道服のままでお茶っこに参加し歓談した。全く違和感なく溶け込む。イエスの福音を直接語らなくても、神さまがそこにおられる。東北の農家に嫁入りしたフィリピンの女性たちがこの大震災で(大船渡)教会に集まった。今までは嫁ぎ先に遠慮して教会に来られなかった人たちだ。今や旦那さんたちが奥さんやお子さんを送迎してくれる。大震災は悲しみだけでなく、喜びももたらした。結局ボランティアに行くと、いつも我々が元気を貰って帰ってくる。人生の山谷(やまたに)を乗り越える力をすべての人にお与えくださいと祈る。

最後に大槌の名物“ばっちゃん”の好きな言葉で締めくくります。大槌の皆さんの力の源泉をみる思いです。

「朝は希望にめざめ、昼は努力に生き、
夜は感謝で眠る。」

(町田雅昭)

追伸：主任司祭の指導の下、昨年12月から毎週月曜日の夜にZoomを使ってロザリオの祈り1環を捧げています。まだ20人弱ですがこれからもっと広めていくつもりです。



2013年5月頃
仮設でのマッサージとお茶っこ風景



片瓜チーム 仮設でのクリスマス会

(片瓜さん撮影)

トナカイの頭のぬいぐるみを持っている“ばっちゃん”が「朝・昼・夜」の言葉が好きなヤスさん。後列の大柄の女性とその隣のサンタ姿が長崎からのシスターです。一番右端のチェック柄の女性がこのあと結婚して赤ちゃんが生まれました。その前の黄色いビブスの女性は仙台から来たボランティア、左端のサンタ姿は山口出身の大槌ベースのスタッフ、大槌町に移住を決心した。その右隣のサングラスのばっちゃんは最年長、いつも集会室に一番乗りだったが、亡くなられ、淋しくなった。写真を見ると色々思い出します。片瓜チームは訪問先を4ヶ所に固定していつも同じ仮設を訪問しました。ここは安渡第二仮設です。★後列右から2目が筆者。

第25回「教会とインターネット」セミナー 開催報告

この数年は毎年2月から3月にかけて開催しているインターネットセミナーですが、昨年はちょうど新型コロナウイルスによる混乱が始まった時期に当たり、開催を見合わせました。今年は、完全にオンラインで開催することにより、二年ぶりに開催することができました。参加者も、全国から約50名の方々をお迎えすることができました。大きな時代の変化を感じます。

今回は、「動画でも福音は伝えられる？」と題して、動画伝道ワークショップ主宰で日本基督教団鎌倉泉水教会信徒、片岡賢蔵氏を講師にお迎えし、講演をして頂きました。片岡氏は、この春まで東京神学大学で神学を学ばれ、これから新潟市内の教会で牧会を始められますが、献身されるまでは株式会社日経映像でディレクターとして番組製作に実際に携わってこられたプロの方です。『ワールド・ビジネス・サテライト』などの経済番組で様々な会社を紹介、様々な人々の営みを魅力的に伝えてきました。



セミナーでは、ミサや礼拝の配信方法に始まり、動画作品として教会の魅力を伝えるために注意すべき点や、簡単にできる工夫などをご教授いただきました。動画の配信も編集もスマートフォン一台でできる時代、必要なことは技術や高度なアプリではなく、むしろ情熱だと、片岡氏はおっしゃいます。その気になればミサの配信はラインやフェイスブックなどでもできることですし、カメラアングルや撮りたいことの前後のカットなど、コツさえつかんでしまえば、「教会ドキュメンタリー」を楽しく製作することもできます。それこそ誰にでも出来ることです。ぜひチャレンジしてほしい、ということでした。

思えば、2020年はリモート元年、オンライン元年でした。感染予防のため何もかも自粛が求められて

いく中、様々なイベントがオンラインに置き換わり、カトリック教会のミサも例外ではありませんでした。このような状況が今後もまったく同じように続くとは限りませんし、リモートという条件の限界も数多く指摘されています。その疲労は誰しものが身をもって体験しているところです。



ワークショップ発信中
片岡賢蔵氏（鎌倉泉水教会にて）

しかし、新型コロナによってもたらされたオンライン配信、オンライン会議、オンライン講義というカルチャーがなくなることはないでしょう。たとえ多少なり元に戻ろうと、完璧に元に戻ることはないからです。動画作品を通して福音を伝える、教会の雰囲気伝えるということの必要性、重要性と新しい意義は、これからますます増していきます。

（インターネットチーム 石原良明）

SIGNIS JAPAN 共催 ＜動画伝道ワークショップのご案内＞

2021年度は、より具体的に動画づくりを始めた方々、教会のための実践的内容にしたいと考えております。初歩的などころからフォローします。

5月21日（金）基本的な編集（1）
特にテロップの効果的な入れ方について

7月16日（金）基本的な編集（2）
特に音楽、セリフの編集について

9月17日（金）題材のを見つけ方（1）
ストーリー性、どんな物語を語るかについて

11月19日（金）題材のを見つけ方（2）
ナレーションを書いてみよう

1月21日（金）制作した動画を発表してみよう

★詳細は SIGNIS の WEB サイトなどに掲載します。